哲学カフェ@名古屋

2014 年 6 月 1 日　フォーラム （企画変更前）

はじめに

2014 年 6 月 1 日用の企画は、5 月 27 夜（カフェ開催 5 日前）に若干変更されました。
当初企画のあり方についての疑義が、参加者の一部から
ホームページの「フォーラム」を通じて呈され、議論された結果です。

これは、その企画変更前のフォーラムを記録のため PDF 化したものです。
このフォーラムの導入部にある《ご案内》が、変更前の企画の説明になっています。
（変更後の企画については 6/1/2014 のフォーラムの《ご案内》をご参照ください。）

PDF 化に際し、プライバシー保護の観点から、
関係者の了解を得て各投稿者の名前は匿名化しました。

また、投稿は古いもの（#の若いもの）から順に表示するように並べ替えてあります。

4 人の投稿者、A、B、C、D （投稿が登場する順）が出てきます。
A さんと B さんは哲学カフェ@名古屋のいわゆる「一般参加者」です。
C、D はともに運営メンバーです。
C はこの 2014 年 6 月 1 日の当初の企画を発案しその告知用の文章（フォーラムの導入部の文章含む）を
書いたものです。
D は哲学カフェ@名古屋の代表メンバーです。

2014/6/1: 「わかる/わからない」とはどういうことか？

名古屋駅西 ホテル ル・ウエスト 中二階 会議室で開催予定の、「メタ哲学カフェ」シリーズ第三回です。

《開催前》
題材のメタレビュー（下記参照）を最初読んだときにわからなかったことを、こちらにお書き込み下さい。また、もし初見での「わからない」がその後の二度読み三度読みや調べもので「わかる」ようになってきた、ということがありましたら、その内容も是非お知らせください。
尚、ここで報告された内容は、カフェ当日に配る配布資料に匿名にして掲載させていただきますので、その旨ご了承ください。

《開催後》カフェの最中に言い足りなかったこと、言い損ねたこと、カフェが終わった後から思ったこと、など。もしありましたら、気楽にお書き込み下さい。

ポストするには「名前」記入が必須となっていますが、これは本名である必要はありません。

《ご案内》（ご参考まで）

哲学に限りませんが、抽象的な思想の説明の文章は門外漢には往々にしてひどく難解なものです。なぜなのでしょうか。そもそも、抽象的な説明が「わかる」とか「わからない」とか、そして「わかるようになる」とは、どういうことなのでしょうか。今回は、先日 3 月 22 日に名古屋で実際に行われた哲学カフェ（人は何に芸術性を感じるのか？）のメタレビューを題材に、この疑問に迫りたいと思います。

このメタレビューは「哲学対話としての質」に焦点をあてたもので、その哲学カフェに参加していなかった方でも読めるようなものです。（詳しくは「メタレビュー」ページを。）そしてこれは、おそらく多くのひとにとって、いわゆる難解な文章に典型的な「わかりにくさ」がたくさん詰まった文章となっています。参加予定者は、事前にこれを読んで「わからなかった」ところを持ち寄ります。その上で、当日の前半、まず互いの「わからない」を発表しあい、そのなかに質の異なる「わからない」が混在していそうなら出来るだけ多様な「わからない」について議論できるように代表的なものを選出します。そしてそれらについて「わからない」と言っている本人が「わかった」となるように皆で説明し合います。誰かひとりでも、そしてひとつでも、「わからない」が「わかった」になれば前半は大成功です。（それがなくても、最善を尽くせばそれで前半は成功です。）後半では、前半の話し合いそのものを題材にして、哲学の説明が「わからない/わかる」、あるいは「わかるようになる」ということがどういうことなのか、そしてその種類や相関などについて、正面切って話し合いたいと思います。

（参加予定者は、題材となるメタレビュー（こちら）を読んだ上で、初見でわからなかったところをこちらのフォームか「お問合せ」を使ってご報告ください。）

- **#1**

A (*日曜日, 25 5 月 2014 07:01*)

この哲学カフェに参加するか、しないか検討しています。目的、趣旨が「わからない」からです。C さんのメタレビューと称するものを、読みましたが、「メタレビュー」に疑問符があります。趣旨も読みましたが、音源か音源を起こして、読んだ方が、レビューになります。メタレビューも、哲学用語を使わずともできるし、その方が哲学の専門知識がない人も参加できます。
哲学カフェにミッション(活動目的)を達成するため、ファシリテーターの専門性の知を高めるならば、状況判断、その根拠、したこと、反応やその後の展開などをリフレクションされればいいのでは？
レビューで、「事実」と「意見」を分ける。事例検討ならば、分けないとだめでは？また、混ぜこぜで、意見交換するにしても、その区別をして書いたり話したりすべきだと思います。
C さんのメタレビューは、C さんの感想文にしか読めません。へー、で済んでいます。
わかる/わからない の問題が、C さんの文の読み手側の、読解力不足、哲学的な思考力不足という独善的な前提に立っているかのようにも思えます。
質問ありますか？ときくだけならともかく、C さんの文章を「解らせる」、しかも一義的な解釈を「わかる」ど大成功という、評価目標は国語の受験問題で「筆者の意図を下記の選択肢から一つ選びなさい」というのとよく似ています。正解を理解する、唯一の解釈方法があるということです。しかし、これは哲学的な態度でしょうか？
哲学的な文が解らない理由を、強制排出してみたら、50 近くでました。おそらく 100 近くでるかもしれません。
今たまたま、大変解りやすい哲学入門書を読んでいますが、なぜ私に「わかる」と思わせるのかと比較すれば、哲学の専門用語を多用せずとも平易に伝えるだけの書き手問題もあると思います。
①哲学を自分の頭で考えて、平易な言葉で深く理解している。②だから人に解りやすく伝える、教えるときに、易しい言葉に言い換えられるし、理解の正確さと深さがつたわる。③そもそも相手に伝えたいだけのことかあり、モチベーションがある。④相手がどうすればわかるのか、相手を理解しようと務めている。⑤試行錯誤しながら、努力している。⑥対等な立場で語りかけている。相手への敬意、おもいやりがある。
C さんのメタレビューは、対話型ではなく、独語です。ダイアローグではなく、モノローグ。
同意も合意もなく、サクサク書かれています。
哲学カフェならぬ、C さん理解の会になりはしませんか？
メタレビューって何だろう。何をめざしているの？
哲学カフェの進め方の改善にもならないし、ファシリテーターのスキルアップにもなりそうにないし、「やとぱり、哲学の専門知識がないとダメ」と哲学カフェ@なごやは羊頭狗肉になりせぬか、と大変危惧しています。

- **#2**

A (*日曜日, 25 5 月 2014 12:12*)

メタレビューの内容そのものについて、意見と質問です。
冒頭に「芸術は正当な市場取引の対象になりえないものではないか」という「定義」が書かれています。これは直観とされていますが、よいでしょうか。「直観」の定義がないので混乱しますが、それは脇に置きます。

市場原理や需要・供給の法則は、直観の対象や内容になりますか？
少なくとも、知覚の対象でもなく、伝聞の対象でもありません。学校の授業で習うか、経済学の教科書に書かれている「物語」です。現在では、芸術品には市場で取り引きされるものもありますが、芸術的価値があっても売れないもの、採算がとれないため芸術活動が継続できないもの(大阪市の文楽支援打切問題)、高過ぎて貧しい人には鑑賞や制作ができないなど「市場の失敗」があるため「公共財」と位置づけられアートマネジメントはそれを前提にしています。文化芸術振興基本法など、法制度も自治体の条例もそうです。
哲学カフェとして、物語について話をすることは、経験の世界ではないため、直観が働かない会話とみるべきではないでしょうか。
レビューでは、もっと身近な対話があったようですが、自分の心の中を見つめ適切な言葉で、一般化、抽象化している哲学的思考があったのではないでしょうか？
哲学に限らず、多様な背景を持つ多くの人で話し合われたら、一般化や抽象的な言葉が使われます。それらを使用するメリットは、おなじ議論をしないためや、さらなる一般化をするためでしょう。しかし、ジャーゴンと言われる専門用語を使う閉鎖的な集団を作ったり、プラスチックワードと呼ばれるような、解った気にさせるものの、曖昧でいい加減だったり、衒学趣味というか、鼻持ちならねポストモダン哲学の流行を思い出させます。ソーカル事件でしたか。
哲学初学者と位置づけ、リハビリでもする医療、治療、教育は、哲学カフェとしてしてきたことの自己否定ではないかとも思いますが、いかがでしょうか？

- **#3**

B (*月曜日, 26 5 月 2014 00:22*)

こんにちわ。いつも開催・進行お世話様です。
久々に HP にお邪魔して、「お！来週！なになに？テーマはわかる／わからない？おもしろそう！」と最初思ったのですが、色々読むうちに、なんだか気楽に参加できない気がしてきました（笑）

数回カフェに参加させて頂いているうちに自分の中で「わかって」きたことは、
〇結論を出す事が目的ではなく（もちろん勝ち負けでもなく）、話をする過程にこそ価値がある
〇何かひとつでも少しでも「わからなかった」ことが「わかった」ら、それはとても価値のあること
〇哲学的な知識も理解も、あってもいいし、無くてもいい
〇何を目的として、何を楽しみとして、参加するかは人それぞれ…

そんな所に居る者にとっては、ちょっと躊躇してしまいます。。

- **#4**

A (*月曜日, 26 5 月 2014 06:31*)

６月１日も近いので、提案ですが、
メタ・レビューをするのであれば、目的・観点を明示して「人は何に芸術性を感じるのか」というテーマで行われたカフェの振り返りをされるか、
「わかる・わからないとは何か」をテーマにした哲学カフェにされてはどうですか？
メタ／レビューは誰のため、何のためにするのですか？
哲学カフェを活性化するため？そのためのファシリテーターの役割や介入方法を改善するためで

すか？
哲学用語を使用して哲学カフェができるよにするため？
哲学用語や哲学史を学習する、哲学カフェを活用した哲学教育の実験ですか？
哲学カフェに参加する人は何のために集まるとお考えですか？メタレビューを開催する人と目的を共有していますか？
「どこが分からない」「分かろうとして何をした。」とか報告させるのは
哲学教育の「研究」「教育」に寄与するかもしれませんが、参加者にとって何か良いことでもあるのですか？モルモットになりますよ。
C さんのカフェ分析を読んで、叩き台にして議論するならまだしも、
それが「わかる／わからない」って重要なことですか？
解らなくても良いし、困らないし、解らない哲学的用語を使うことは悪い見本かもしれません。授業ではなく、時間と費用をボランタリーに出し合って開く哲学カフェなのですから、知的な冒険に駆り立てるだけの「興味・関心」「共感」のあるテーマ選択に悩まれているはずです。
それが C さんの感想文批評を、C さん以外で「わかる人」が「解らない人」を「わからせるようにする」とは、何でそんなことします？楽しくてワクワクすることでしょうか？
C さんが難解な抽象的な言葉を使わずに相手に伝えるために努力することではないですか？
抽象的な言葉を哲学はそりゃ使用しますよ。議論の歴史が積み重なれば。
哲学研究者のコミュニティというか共同体内部で使用する言葉なり
個々の過去の哲学者固有の意味の読み取りをゼミで語りあうこともある。
哲学カフェと哲学ゼミとは違うのではないですか？
哲学ゼミをしたいのでしょうか？ゼミならばゼミと銘打った方がいいのであないですか？
C さんの文章の理解だって１人ひとり違うかもしれない。それを併せて、さらに「解らない」人をわからせる必要がありますか？数学や理科や国語で「ピア学習」ってありますが、あくまで真理があって、それに達するために「できる・わかる」生徒が「できない・わからない」生徒に教えますが、ちょっと違うのではないのですか？
他人の意見を解る、自分の意見を解ってもらうことは、それぞれの課題です。普段の哲学カフェでできることでしょう？
内在主義・外在主義を解りやすく言い換えられてはどうですか？１人で文書を書くというコミュニケーション方法だから、安易に難解で抽象的な言葉を使いますが、哲学カフェだと、「その言葉は難しいので解りやすく言い換えてください」と質問が出て、悩むのは C さんです。
横にいる人が「C さんが言いたいことはこうだよ」などとサポートしてほしいということですか？でも、そのサポートは正しいのかな？
いずれにせよ、C さんの言いたいことを「解っている」か「解っていないか」を判定するのは C さんだけではないですか？
「わかる」と「賛成する」は違いますよね？C さんの論理や理路を「内在的に」＝前提とその後の論理展開のつながりを理解しながら、それって「前提」がおかしくないか？「理路」の「論理が飛躍している」「論理が誤っている」とか、ここがおかしくないか？って討論するのが哲学でしょう？
なぜ「わかる」ことが「大成功」なのですか？
「わかる」後で、その論理について問題提起をできるならば、大成功だとは思いますが。
それとも「哲学用語」を理解できたら「大成功」なのですか？
メタレビューで「大成功」と書かれている以上、これが重要な目的のようですが、何故それが目的になっているのでしょうか？
質問ばかりですみません。本当に「わからない」のです。

- **#5**

A (*月曜日, 26 5 月 2014 06:50*)

「哲学カフェ」の成功・失敗の指標ですが、
他の意見を発表している人の意見や考えを理解・解ること(＝賛成することではない)を踏まえて、
自分の頭で考え、借り物ではない自分の言葉で、自分が思うこと
他人の意見に対して違和感を感じて、自分の言葉でより深く、広く
他人の共感や賛成を得られる言葉を見つけ出して、発することではないでしょうか？
「他人の言葉を理解すること」は、公共の場で一緒にいることを相手を承認することでもあるし、論理を展開する上で必要なことですが、
目的や成果は
「自分を深く理解できたかどうか」「自分の世界が広がったかどうか」「共同討論した人で問題を深めることに『参加』した、貢献した」「生きる意味や価値と結びついた」かではないでしょうか。
哲学研究者や哲学マニアは、哲学史を学び〇〇主義だのと言うのはよいのですが、哲学カフェに集まる人は多様な動機で参加されるのであって
そのコアとなる部分を大切にしなければ、
「強制」や「権威」が出てしまうようでは発展性がないと思います。

- **#6**

C (*月曜日, 26 5 月 2014 21:23*)

まずは、A さん、B さん、忌憚なきご意見を提供いただきありがとうございました。ぜひ、今後も、思われたことをこのように遠慮なくお伝えくだされば幸いです。哲学カフェというのはそういうところでなくてはなりません。おふたりとも、「何か変だ」と感じられたときにきちんとそれを発言して下さる貴重な人材です。是非今後とも、この調子でよろしくお願いいたします。

さて、6月1日の企画(「メタ哲学カフェ」第三回、「わかる/わからないとはどういうことか？」の企画)を提案し、その告知・説明のための文を書いた者として、おふたりの寄せて下さったコメント投稿に対してお返事するべき、と思うのですが、まずはじめに A さんのコメントに対してお返事させて頂きたく思います。というのも、今回 A さんからいろいろな意見を寄せていただいてまず驚き、かつ反省もしたことなのですが、A さんは6月1日の企画意図を大きく誤解されております。
(B さんへ。 B さんの「躊躇」もまた、下記で説明するような同じ誤解にもとづいてはいないか、危惧しております。読んでみて、もしなにか違う理由から参加を躊躇されているなら、このフォーラムか、あるいはもしプライバシーに関わることがあるならメールでも結構ですので、出来る範囲でお聞かせくださいませんか？ [C のメールアドレス] です。*をアットマークに変えてください。)

きっとホームページに掲載した説明が、なにがしかの意味でひどく「わかりにくい」ものだったために、このような誤解を招いてしまったのだと思います。企画提案者兼告知文起草者として、まずこの点をお詫びします。これ以上同じ誤解が広まらないためにも、まずはこの誤解についてきちんと説明

し、企画の意図を正しくお伝えすることが急務、と考える次第です。
（もちろん、このコメントを書き上げて投稿した後、ホームページの説明自体をもっとわかりやすいように修正するつもりです。ただ、今回の「誤解事件」もまた、ある説明が「わかりにくい」ということのひとつの事例として、６月１日の対話の材料になりうるかもしれないものです。「わかりにくい文」の一例として、修正前のもとのままの説明文もそのまま保存しておくつもりです。題材として使うか否かは進行役の D さんの裁量にお任せしますが。）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝
さて、誤解というのは、A さんがコメント#4 で言及されていた、「C さんのカフェ分析を読んで、叩き台にして議論するならまだしも」という言葉に一番くっきり表れているかと思います。というのも、６月１日のメタ哲学カフェの意図はまさしくそれだからです。

この日の対話のテーマは「C の思想がわかる/わからない」ではなく、あくまで一般的な意味での「わかる/わからない」（哲学的ないしは抽象的な文章を読んだときの「わかる/わからない」）ということであり、C のメタレビューは、あくまでもその対話のための材料となるような具体的経験（「わかる/わからない」などの経験）を生み出す題材として利用するためのものにすぎないのです。（正直言うと、実は「すぎなく」はなくて、プラスアルファの狙いもあるのですが、それについては、後述するように、ここでの説明はさせさせていただきます。）

なので、基本的には、必ずしも C の文章でなくても良かったのです。哲学的/抽象的文章であって、かつ、そのような文章によくあるタイプの「わかりにくさ」、、、、、その中にもいろんな種類があると思われるので（この「種類」については、4 月 26 日の「メタ哲学カフェ」第一回のレビューをご参照ください）、できるだけ多様な種類の「わかりにくさ」の詰まった文章であれば。失礼を承知で個人名を出させていただくと、鷲田清一先生の文章でもよかったのです。
（今のは下手なジョークです。。。。これも、4 月 26 日のレビューをご参照ください。実は、この「わかる/わからない」というのは 4 月 26 日の対話中に実際に出てきたトピックで、これをもとに私（C）がカフェのあとのランチタイム座談会で次回テーマとして提案して採用されたものです。自分の書いたメタレビューを題材に使うという案も含めて。もともと 5 月 11 日に予定されていましたが、「この企画はもっと十分告知期間をとってからやるほうがよい」という理由で 6 月 1 日に延期になったものです。）

くどいかもしれませんが、誤解の核と思われる部分をもう少し詳しく説明させてください。

6 月 1 日の題材の文章の役割とは、いわゆる難解な文章についての「わかる/わからない」ということについて語り合うための具体的経験、、、、、できれば共有経験、すなわち同じ文章の同じ部分についての「わかった/わからなかった/わからなかったがわかるようになった」の経験、を生み出すための、その共通材料であること、それがすべてです。そして、ここが特に重要なところですが、ここでいう「わかる/わからない」とは、当該の理解が著者の意図した文意に本当に沿うものであるかどうかは、まったく問うものではありません。

こんな経験はありませんか？　哲学者などの難解な思想の書を読んで、初見でまったく意味がわからなかったところが、何度か読み返すうちに次第になんとなくわかるようになった、、、、と思っていたら、何年か後、もっと素養がついたあとで同じ書を読んでみたら、当初自分がそれなりに「わかった」と思っていたその理解はまったく見当はずれだったと「わかった」。。。と思っていたら、他の人の解説を読んでみたらまたそれともまったく違っていて、もう何がなんだか「わからなくなった」。。。。

例えばそんなような経験です。私は結構あります。そもそも、誰か他人の書いた文章をちゃんと著者の意図通りに解釈できているかどうかなどは、永遠に確証をもてないものです。もちろん、「わかった！」と思う瞬間は誰でも「これが著者の本当の意図だ！」という「確信」（後で振り返ってみれば必ず「不当な確信」に成り下がってしまう定めの、奇妙な「確信」）をもっているものなわけですが。。。

ともあれ、このような経験に現れる「わかる/わからない」も、立派に 6 月 1 日のテーマになっている「わかる/わからない」の一種です。（全てではないでしょうが。）きっと誰もが持つ、とくに哲学カフェのような集まりにやって来る人たちにはきっとおなじみの、このような知的成長にまつわる経験について、そしてそのほかの種類の「わかる/わからない」について、まずは参加者全員で同じ文章を読んで共有地盤を持ち、そして可能ならば「わかる/わからない」の共有経験をもったうえで、一体それらはどのような経験なのか、と、具体的（共有）経験をもとにして語り合おう、というのがこの 6 月 1 日のテーマです。

なので、企画の説明のなかで

ひとつでも「わからない」が「わかった」になれば前半は大成功です。

と言っているのは、決して、「誰かが C の言っていることの意味を少しでも理解できるようになったら大成功」という意味ではなく、「最初『わからない』と感じていた事柄が『わかる』と感じられるようになる、そのような『認識の変化』の具体的経験が、誰か一人にでも生まれれば、前半＝『後半の対話のための材料を生み出すための予備ステージ』としては、大成功」という意味です。なぜこれが「前半としては大成功」かというと、「わかる/わからない」について考える際により深い洞察を与えくれるのは、単に「わかる」とか「わからない」といった受動的・静的な経験よりも、おそらく、理解しようとする能動的な行為にともなって生まれる「認識の変化」の経験のほうではないか、と思われるからです。

たとえば、付け足すなら、

ひとつでも「わかる」が「やっぱりわかってなかった」になっても、それでも前半は大成功

ともいえるものです。いや、むしろ、比べるならこっちのほうがよほど大成功ですね、きっと。。。そのほうが今回のような誤解もきっと生まずにすんだでしょうし。私の文のチョイスが悪かったです。ここは。。。A さんのご指摘のとおり、私は説明するということが非常に下手です。この指摘は謹んで、そして感謝とともにお受けいたします。ありがとうございます。

本論にもどります。今回たまたま「題材文の著者（C）がカフェ参加者に入っている」という特殊な形にはなっていますが、もちろん言うまでもなく、だからといってこの日の対話のテーマである「わかる/わからない」の判定権を著者＝C が持つわけでも、まして、「参加者が著者＝C の意図通りの理解を得ること」を目的とした対話をするわけでもありません。

いっそ、この日のルールとして、「著者＝C は自分のメタレビューの意図を一切説明しない。また、議論の俎上に上げられたいかなる仮説的解釈についても、それが著者の意図に沿う解釈であるか否かについては一切言及しない」ということにしておいてもよいかと思います。

あるいはいっそ、C の文章を題材にするのはもうやめて、鷲田先生（4 月 26 日で「わかりにくい文章」を書く論客の例として挙げられた）の文章にしたほうがいいかもしれません。もし「哲学カフェ運営サイドの人間が個人的主張を行っている文」を題材に使うことに対して強い抵抗のある参加者がおられるなら。。。。私としては、A さんも、（今の誤解さえ解ければ）「運営サイドの人間の個人的主張」でも「叩き台」として使う分には問題ない、と許容してくだされば嬉しいのですが。
（私も「自分で書いたもの」を対話題材に使うことについてはある種の後ろめたさは感じているのですが、それをおしてもなお自分で書いたあのメタレビューの文をこの企画のための題材文として提案したのには、実はある大きな理由があります。メタレビューをよく読んでいただければ、そして私の説明が上手くいっていれば、その理由が何であるかは分かるのではないか、、、と期待していたのですが、、、、完全に思いあがっていた、と今回思い知らされました。。。ありがとうございました。ともあれ、このようなわけで、その「理由」が何かをここで説明してしまうとある種のネタバレになってしまう可能性があるので、説明は避けたいとおもいます。ただ、そのことを信じていただければ幸いです。）

私の説明は以上です。
どうでしょうか。。。私が冒頭で述べた「誤解」は解けましたでしょうか。。。。

- **#7**

C (*月曜日, 26 5 月 2014 21:38*)

下記、コメント#6 に、一箇所ミスがありましたので訂正します。

「誤解」の説明に入ってからの第二段落の最後の部分で、

後述するように、ここでの説明はさせさせていただきます

となっているのは、

後述するように、ここでの説明は省略させていただきます

の誤りです。ご了承ください。

- **#8**

C (*月曜日, 26 5 月 2014 21:50*)

尚、取り急ぎ、次の点も追加で明言しておきたく思います。（コメント#4 を見る限り A さんはこの点については誤解されてないと思いますが、今回の件でちょっと不安を覚えましたので、念のため。）

6 月 1 日のための題材となっている C のメタレビューには、「哲学対話の質」とは、「よき哲学対話」とは何か、についての、かなり狭量なひとつの考え方が示されています。それは事実です。ただ、これは、あくまで C 個人の意見です。しかもそのすべてではありません。そのひとつです。私は、「哲学対話」にはいろんな種類の「質」、「よさ」がありうる、と考えています。そして、そのなかのどれかひとつだけを採用して他を排除するような場に、哲学カフェ＠名古屋をしようとは全く考えていませ

ん。たとえそれらの間に矛盾があっても。（事実、それらの間には矛盾がある、とも、私は考えていますが、それでも、その矛盾自体をどうにかして受け入れるべき、と考えています。）

仮に私がそのような矛盾を嫌って、一定の整合性のとれた数種の「質」「よさ」の基準ばかりに名古屋の参加者の皆さんの目的意識をそろえて排他的にやっていこうと考えたとしても、D さんを初めとするこの集まりの他のメンバーはきっとそんなことを実現させなどしないでしょう。現に今、A さんが、私がそのような動きに出ている（というのはもちろん誤解ですが）のを、こうして反対意見を述べて、そういう独善的暴走を止めようとしています。これは素晴らしいことです。哲学カフェとは、まさにこういう場であるべき、と私も思います。

ホームページの「活動」の中の「メタレビュー」のコーナーに書いてあるとおり、メタレビューは「哲学対話の質」の向上に資することを目的にしております。が、そこでいう「哲学対話の質」については、この企画（「メタレビュー」）は、なんら教条的・独善的な基準ないしは思想を押し付けようとするものではありません。「どのような対話をもって『よき哲学対話』となすか」「どのようなことをもって『哲学対話の質』となすか」についてもオープンエンドに、各メタ・レビュワーが自由に考察、議論、主張するプラットフォームとして、「メタレビュー」は企画されています。その点をご理解いただけますよう、よろしくお願いいたします。

- **#9**

A (*火曜日, 27 5 月 2014 03:02*)

C　さん

鷲田清一さんの文章と C さんの文章を読み比べれば解ることですが、
鷲田さんが解りやすく、C さんの文章はわかりにくいです。
「わかりにくさ」の質が違います。
哲学用語の問題ではなくて、C さんの文章が端的にわかりにくいです。
もやもやした鬱屈した霞がかかった世界像を
視界良好にするのが哲学の役目、もやもやをさらにもやもやにしてどうするの話です。

「叩き台ならまだしも」と書きましたが
哲学的文章の事例として　C さんの文書を取り上げることを支持したことではありません。あくまで反対です。叩き台にもならないからから困っているのですよ。

哲学について書かれた文章は難解という誤解や偏見を前提とされているようですが、ヘーゲルやハイデッガーやキエルケゴールやら、訳文がひどければ解りにくいのは別にしても、思想体系を理解するためであれば頑張って読みます。彼らとご自身を比肩されてどうするのですか。

今回は　哲学カフェのレビューおよびメタレビューです。
C さんの書かれていることは単純な内容の感想文ですし、独創的なオリジナルなことを語っているわけでなく、外在主義と内在主義など知識論の哲学史の構図を見て取ったというだけの話です。もっと易しく書けるはずです。それに、それがどうしたの？の話ではないですか？
それから、鷲田さんの名誉のために言いますが、鷲田さんはもっと高度のことを一般の方向けに現に書かれていますよ。

易しく書けることを、わざわざ難解に書かれている悪文になっていませんか、というのは私の感想です。
哲学をもっと解りやすい言葉で、誰もが哲学していること、できることを、哲学と社会を結び直し、哲学にルネサンス・再生をという哲学カフェに逆行するかのような場違い企画ではないですか？
解らなければ解らないほどありがたいのは、お経でしょう。
解らないから高尚だとか、哲学に対する誤解と偏見という火に油を注ぐ、哲学カフェと真逆のテーマと進め方に驚いているのです。

私も哲学科出身ですが、哲学科の先生方や学生同士でさえ、ゼミの討論で C さんのような語り口で話し方をしたり、レビューをしたところを目撃した記憶がありません。相手に解って持ってナンボだからです。

C さんの文書を読んで連想したのは卒論・修論の「中間発表」または学会の１０分間程度の発表です。
この場合、聴いた人から質問や意見があります。ありがたい話で、その質問や意見を通して、見落としていた点やアドバイスがあって、曖昧さんがないクリアな論文になります。シビアだけど、研鑽の場ですからね。

変だなと思うのは、
C さんは、自分の文章は難解なところがあるが、それは「質が高い」「よい思考」だからと、ご自身の指標で前提をされていて、
「解らない人」が「解る」ようになるために
何を読んだかとか調べたかとか努力したかとか
質問や意見や助言を聞くのではなくて、聴者が解るように努力すべきという
構図になってしまっていることです。
辞書がなければ読めない暗号のようなメタレビューって正直にいいいますが、メタレビューの用を足しません。失敗作でしょ？
参考文献はご自身が書いたり言うべきことであって、カフェの参加者に何を読んできて解ったかとか、解ろうとどのように努力したのかとか聴くなど、対等な立場の方々が集まるなかで、越権行為で不遜ではないですか？

相互理解の場であるならば、ご自身がそのように考えるにいたったことで
何を読んだか、調べたかとか、まず塊より始めよ　です。

これでは、私の理解の高みにまで、皆さん上がってきなさい、学習方法まで指導してあげる、といった上下関係ではないですか？これで「対話」が成りたちますか？

私の意見を「誤解」と断じているようですが
今回のメタレビューを、どう読むのか　C さんの意図通りに
読めなくては「誤解」になってしまうということと同じではないですか？
問うに落ちずに語るに落ちてます。そうなるのですよ。

正解がない、ただし哲学的に根本的に考え続けることは諦めない
それが　哲学カフェではないですか？

哲学は普遍性を追求するから、異なる意見に出会うたび、一般化し抽象化していきますが、「普遍性」の追求は、抽象的な言葉の粗製濫造になる方向だけではありません。初心を忘れると進化したマンモスの牙のようで、無用の産物ですよ。
どの学問も抽象的な言葉を使います。弁護士さんになるのに、法律用語の学習や法学的思考の訓練は必要ですよね。
法曹学者や哲学学者など一部の世界、共同体に入れという方向は
学会なりに任せたらいかがですか？
生活や生きていることの意味も探して参加している方がいるのが哲学カフェ。研究したい人ばかりが来ているわけではないですよ。

異なる価値観や意見に出会ったとき、それを一般化、抽象化しようとする
哲学が生成する現場が哲学カフェなのではないですか？哲学史や哲学用語によらずに、自分たちでその場で集まった人たちで、新たな普遍を探しているという、生のライブの哲学ですよ。
メタレビューは解剖するわけだけど、慎重にしないとね。
哲学史や哲学用語を学習する場ではないでしょう？
難しい哲学書の解りにくさの経験とか、それが読めるようになったとか
C さんの話の出発点は、逆立ちしていませんかということです。
メタレビューが哲学対話の質の向上というのは、
哲学カフェで起きていること、そこから始めるものでしょう。
何で、難解な哲学書読解から話がくるのですか？

目的が混在しているのですよ。
「人は似に芸術性を求めるのか」というメタレビューの看板に
「哲学的議論がわかる／わからないとは何か」の幕がかかって
「おや？」と思っていると
別次元の感想文読解訓練の場になっている。

メタレビューなので、リフレクション・反省・振り返り、深い掘り下げなのでしょう。自分の心に深く潜行することで、他の人との共通点を探るという方向もあるのですよ。

対話の質の向上　というところの理解からして同床異夢の方向性が違うのではないですか？

C さんの考えを　C さんに変わって、C さんの書かれていることを解らせることをさせる、解らせれば大成功・・・

やっぱり変ですよ。オープンエンドじゃないでしょ。

というか、誰が自分の血が通っていない思想を真剣に伝えようとしますか？
「自分の意見は、誰もが論理的に考えれば合意してもらえるものである」と自らの意見の普遍性を信じて、意見を言うのが
哲学カフェの参加者のモチベーションですよ。

何で他人の思考の論理を追わされて、さらにその理路を説得しないといけないのですか？会社の営業とかならともかく。ボランタリーに集まったところで参加者に要求することでしょうか？授業とか

強制力があるならともかくね、社会人のノンフォーマルな活動ですよ。

C さんが、自分の考えたことは　誰が同じように考えても正しいものであるから、誰にも理解され、誰にも理解させることができる

とお考えのようですが
残念ながら人それぞれ考え方が違うので
だから　哲学カフェが成立し、楽しいのですよ。

誤解とか何度も書かれていますが、
正解、誤解　ということもまた、C さんが決めることではないのですよ。
そこから言い出すと　独善　問題になります。
一概にいえませんが、誤解だ、誤解の蔓延だと反論していては　対話とはいえないときがあります。

D さんはファシリテーターとしては　黒子に徹するというスタンスです。
C さんは、自身をお手本、見本にするというスタンスです。
でも、それは「ファシリテーター」（人を哲学するように促す、そそののかす）とはいえないのではないかと思います。
教師になってしまっています。悪い意味での。

言葉が激しくなっているかもしれませんが、
哲学カフェというものに、熱い期待を持っています。
権威やアカデミックなものに寄りかからない
自分の頭で考え、自分の言葉で語る場　としてです。

ご寛恕ください。

- **#10**

D (*火曜日, 27 5 月 2014 15:02*)

6/1 の企画について、A さんから手厳しくも温かいコメントをたくさんいただけたことを、今回の企画を考えた者の一人として感謝しています。

今回の「メタレビューを題材にして、それを踏まえたうえでの対話」という企画は、通常の哲学カフェよりももう少し噛みごたえのあるものにしたいという、僕の変な欲望に端を発したものでしたが、これは「哲学カフェ」に期待を寄せてくださっている参加者の方々をやや下にみる傲慢なものであったと反省しました。
「ぶーれのほうでは試行錯誤を目いっぱいする」というのを盾にして、きちんと企画内容を検討することなく、「なるようになる」という感じで実行しようとしていた向きも（私個人として）ないわけではなく、そういう意味でも、A さんと B さんにこうやってストップをかけていただいたことはとても感謝しています。ありがとうございました。
また、矢面に立たせることになってしまった C さんには申し訳ないことをしました。忙しさにかまけて放置してしまったことをお詫びします。

そこで、提案ですが、6/1 の企画を以下のように趣旨変更できないかと思います。
テーマは、「「わかる／わからない」とはどういうことか？」でほぼ同じです。
そのうえで、題材として３月のメタレビューを用いることは取りやめます。
案内文を以下のように変更したうえで、「わかりにくい」文章のサンプルの一つとして、メタレビューを参照できればと思います。

案内文：哲学に限りませんが、抽象的な説明の文章は門外漢には往々にしてひどく難解なものです。なぜなんでしょうか。そもそも、抽象的な説明が「わかる」とか「わからない」とか、そして「わかるようになる」とは、どういうことなんでしょうか。「わかりやすい」文章や「わかりにくい」文章のサンプルを各自で持ち寄ったうえで、それを読んだりしながら、この問いについて考えてみたいと思います。

ご意見等ございましたら、よろしくお願いいたします。

- **#11**

C (*火曜日, 27 5 月 2014 20:42*)

D さんの提案で私の方には全く異存ありません。私も何か、自分が初見で歯が立たなかったような手強い文章、探してみます。そして、出来れば、それがどのようにしてわかるようになって行ったか(少なくとも自分なりの理解が出来るようにはなって行ったか)、そのプロセスを頑張って思い出してみます。あるいは逆に、わかるつもりだったものがわからなくなったような文章を。とにかく、「わかる/わからない」について考察するのに良い材料となりそうな実際経験を私からも一つ二つ提供出来るような文章(と、それにまつわる経験)を、探してみます。

A さん、

今回のやりとりを振り返って、やはり「運営」サイドの人間が自分の書いた文章を題材にするのは、どうあがいても独善の批判を免れるものではない、と、反省いたしました。たとえそれにどのようなメリットがあると自分自身が思っても、それをキチンと説明もせずに自分の文章を使うのは独善です。思い上がっていた、と思いました。申し訳ありませんでした。

勇気をもって主催側の独走にストップをかけていただいたことには、D さん同様私も感謝しています。哲学カフェ@名古屋が今後もこのようにオープンに、哲学カフェのあるべき姿、あるべきでない姿についてのメタ対話をしてゆける場であるように、私も最善の努力をしてゆこうと思います。なので、そのような意図からであれきっと生まれてくるであろう私の独善については、今後も厳しく、、、でも寛容に、指摘して下さい。よろしくお願いします。

哲学カフェ@名古屋は、いいチームになってきてます。そう思います。
B さんも A さんも、ありがとうございました。

- **#12**

B (*水曜日, 28 5 月 2014 01:04*)

こんばんわ。
みなさんの腹を割った意見を読ませて頂けて、「これでこそいい会だ！」と思いました。
開催する方々は、毎回のテーマ決定や進行やまとめにご苦労がある。回数が増えれば増える程、テーマを考えるのが大変なのはどこにでもある話ですよね。お世話様です。
参加する方々は、参加したい時だけ参加すればいい、と、ある意味自由気まま。気に沿わなければ、参加しなくなる。。

そんな中、A さんのように思う所を包み隠さず仰るというのは、とても貴重だと思います。
これからも、そういう仲間の集まる場であって欲しいです。

- **#13**

A (*水曜日, 28 5 月 2014 01:43*)

C さん、B さん、D さん

「哲学カフェ」が、どこかの政権の言うような意味とは違いますが
「新しい」「公共の場」が生まれる貴重な実験の場になって欲しいという
私的な「欲望」があり、ある意味では公益、ある意味では私益の意見を書きました。
発言と行動とが矛盾してはいけないものと思います。
以後の発言と行動にも責任はとっていきます。
真意にそって理解していただき、大変ありがたく思います。

部外者の方がみたら、変に思われる意見交換かもしれませんね。

いろいろ悩んでおりましたが、意を汲んでいただきましたので
６月１日は参加いたしますので
よろしくお願いいたします。

- **#14**

B (*木曜日, 29 5 月 2014 01:20*)

哲学を深く探求されたい方には大変申し訳ありません。
参加を重ねるうちに、学問としての哲学を深く学びたい時がくるかもしれませんが、今はとってもライトな感覚で参加したいと思います。
６月１日、楽しみにしております。
よろしくお願い致します。

別添資料 1

以下は 2014 年 6 月 1 日当時のホームページの「メタレビュー」のコーナーのテキストです。
フォーラムの導入部からのリンクはもともとこのページに張ってありましたが、
記録用にこの PDF にも別添資料として採録させていただきました。

メタレビュー

哲学カフェのレビューというものは、大きく分けて二つのことをするように思われます。第一に、「そのカフェでどのようなことが話し合われたか」という問いに答える対話内容の報告です。第二に、「どのような議論の展開となったか」、「そのような展開は、哲学対話として評価すべきものか」などの問いに答える対話の展開過程の報告とその評価です。実際にはこんなふうにきれいに分けられないものですが、概念的にはこうした二つの側面が哲学対話のレビューにはあると思います。

ところで、「哲学」についての由緒ある考え方のひとつとして、「思考の哲学性はその内容ではなく展開過程にある」とするような考え方があります。これは「哲学とは何か」、「哲学とはそもそも教えうるものか」などとも関わるメタ哲学の問題であり、哲学者の間でも議論の分かれるものですが、少なくとも哲学カフェという運動は、根底でこの考え方に基づいた意味での「哲学対話」の輪を広げようとする運動であると思われます。しかし、通常、カフェでの対話のレポートやレビューはどうしても内容の報告を含まないわけにはいかず、その結果、展開過程に焦点を当てにくくなりがちです。そこで哲学カフェ＠名古屋では、今後、初めから「哲学対話としての質に主眼をおく。そのためには対話内容の報告は二の次で構わない」というスタンスのレビューを（ときどき）書いていきたいと思います。

これを「メタ・レビュー」と呼ばせていただきます。

注：「メタ・レビューは対話の展開過程のことしか書かない」とはしません。「思考の哲学性はその展開過程にある」という考え方は決して百人が百人賛成するものではないからです。もっと開放的に、「今後の哲学カフェの哲学対話としての質の向上を目指す」、あるいは、「どのような質向上を哲学カフェは目指すべきか、と考える材料を供する」ためのメタ・レビュー、とさせていただきます。

尚、蛇足ながら、「対話の哲学性はその展開過程にこそある」とするならば、目安としてはメタ・レビューは次のような問いに答えるようなものでしょう。
①　どのような対話の展開があったか。
②　そのような展開は、哲学対話としての対話の質を高めるものか、落とすものか。
③　なぜレビュワーはそれらの展開をもって「質の高い／低い哲学対話の展開」と評するのか。（レビュワーが思う「質の高い／低い哲学対話の展開」とはどのようなものか。）
④　なぜそのような質の高い／低い展開が生まれたのか。（進行役の言動や場の演出などにその原因はあったか。）

こうした問いに答えるようなメタレビューを続け、そして公開してゆくことで、哲学カフェ運動の質的向上に少しでも資することが出来れば幸いです。

別添資料２

以下は企画変更前の予定題材であったメタレビューです。
フォーラムの導入部からのリンクはもともと、このメタレビューをダウンロードできる
ホームページのコーナーに張ってありましたが、
記録用にこの PDF にも別添資料として採録させていただきました。

メタ・レビュー

2014 年 3 月 22 日　哲学カフェ「人は何に芸術性を感じるのか？」

今回のカフェでは対話を録音したため、どのような対話の展開があったのか、あとから何度も音源を聞きなおして再考、再解釈することができました。そのおかげで、いろいろな興味深い展開（「哲学対話の質」の観点から興味深い展開）に気づくことができました。

1

冒頭で、ある参加者がひとつの仮説を早々に提出しました。曰く、「市場による『正当な』価格決定の対象たりえないものが芸術ではないか。あるいはそのようなものに人は芸術性を感じるのではないか。」ここでいう「正当な」価格決定は、その後の対話を通じて、オークションなどで行われる「恣意的な」価格決定に対比されるものであるということが明らかになっていきました。すると、これに対し、ある方が反論しました。「物の値段とはそもそも需要と供給で決まる。この絵《と言いながら壁にかかっていたゴッホの「ひまわり」のプリントを指して》のオリジナルにしても、巨額の値がついたことがあるが、それは需給の極端なアンバランスのせいで、つまり市場による『正当な』価格決定では？」そこでもとの提案者氏が「なるほど、そうか」と一旦納得すると、その後議論は違う流れに移り、この流れはここで途切れました。

哲学的な対話にはこのようなやりとりがよく生まれます。「〇〇とは何か」型の問いに対し誰かが仮説的な定義を提出すると、その仮定義に合わないながらも〇〇の一例である、あるいは、その仮定義に合いながらもとても〇〇の一例とは思えない、などと**直観的に**思える具体例、つまりその仮定義に対する**直観的反例**を持ち出してきて仮定義を論駁する、という対話の展開です。[1]　「哲学」についての私の個人的な考え方の**ひとつ**によれば、こうした展開は「哲学の起動」のためのよき足場作りとなりうるものです。ただ、この展開それ自体は足場作りにすぎず、

[1] 正確には、前者が反例となるのは仮定義が「〇〇であること」の必要条件として理解されている場合、後者が反例となるのは、それが十分条件として理解されている場合、の話です。

対話がそこで終わってしまっては、哲学は生まれそこないます。（あくまで、私の考え方のひとつによれば、です。）

なぜこのような展開が哲学起動の足場作りとなるのか、といえば、それは仮定義を提出する側と反例を持ち出す側が**「〇〇とはなにか」についてすでに一定の直観的前提を暗黙のうちに共有していた**ということが、こうした展開を通じて浮き彫りになるからです。いつ共有していたかと言えば、両者が「その反例は確かに〇〇の一例である/ではない」と直観的に合意できた時に、であり、まさにそのように合意できたというその事実によって、この暗黙前提共有が浮き彫りになるわけです。今回の例で言うと、「『ひまわり』は芸術だ」（または、「人は『ひまわり』に芸術性を感じる」）、そして「『ひまわり』オリジナルのオークションによる価格決定もまた市場原理にもとづく『正当な』ものだった」という二つの**具体的判断**について、両者は（そして対話に「ついて行っていた」もの全員が）合意できていたわけです。

私は、判断や認識に際しての人の「心」はまっさらではなく、その文脈や使われる言葉のチョイス（言語的に行われる判断・認識の場合）などによって一定の判断**原則**や認識**基準**などをいわば覚醒させている、と思います。対話においては、（直観的反例のような）**対立の中に生まれた直観的合意**は、対話者達がその合意の場面でともに覚醒させていたそれら、おそらくは**対話者達のような種類（例：同じ言語を話す）の人たちがそのような判断場面において典型的に生ずる暗黙の共有前提**に、本人達が気づく手がかりになりえます。このように、ある場面である前提に根ざした判断や認識をしていた当の本人が、その、まだ湯気のたつ判断や認識を振り返ることでその場面と前提に気づいて自覚的に掘り下げ、「今『どんな場面』で『何』が起きたのか」を言語化しようとすることこそ、真の意味での「哲学」のはじまりだと私は思います。（くどいようですが、「哲学」についてのひとつの狭量な考え方に基づき、の話です。）

なぜゴッホの「ひまわり」は芸術なのか？正確には、**なぜ私達はあの場面で「人はゴッホの『ひまわり』に芸術性を感じる」と思ったのか？**　そして、**なぜ私達はあの場面で「オークションもまた『正当な』価格決定」だと思ったのか？**（これらについて合意が生まれたあの場面は、一体**どんな場面**だったのか？）このような共同自己反省的な問いを、誰かが･･･私が･･･発すれば、また別の「よき哲学的展開」があったかもしれない。特に、普段からこのような「哲学」観をもっていた進行役＝私こそ、だれよりこの対話展開に哲学起動の一大チャンスを見つけてしかるべきでした。

サッカーに喩えるとこんな感じです：　ある参加者がパスまわしの起点として仮定義を提出。パスは次々つながり、最後に、またもとの提案者氏が、哲学起動につながりうる最高のラストパスを出す。つまり、「ひまわり」の直観的反例に氏が合意し、それをきちんとことばにしたところまで、質の高い哲学対話を生み出す足場が各発言で徐々に作られていた。しかし、これがラストパス＝哲学起動チャンスと気づき得たはず（シュートコースが見えたはず）の私は、あの場あの時、このラストパスに反応できなかった。ありえたかもしれない「哲学対話」がうまれそこなった。。

これは、「残念な対話展開過程」の一例だった、と思いました。この展開をこのように解する限りにおいて、の話ですが。

２

直観的反例は、共有されている暗黙の前提に対話者達が気づくための材料となりうるという点で、哲学起動のよき足場となり得ます。これと対照的な形のよき足場もあると思います。（引き続き、「哲学」についてのひとつの狭量な考え方によれば、です。）

哲学カフェのような対話においては、各参加者がテーマ（のことば）などに刺激されてそれぞれにさまざまな判断原則や認識基準などを暗黙のうちに覚醒させて臨むわけですが、場合によっては各自が覚醒させている暗黙前提のあいだに、対話にとって致命的な食い違いが生じることもありえます。「おなじテーマ」であっても、各参加者の個人史的背景によって、前提の覚醒の生じ方に食い違いが生まれることはいくらでもありうるからです。こうなると、対話参加者は（少なくともしばらくの間は）そのことに気づかないまま議論を空転させることとなります。このようなすれ違い議論もまた、もしすれ違っている当の参加者達自身が何かのきっかけでそのすれ違いに気づいて整理し、言語化できれば、それもまた絶好の哲学起動の足場になる、と、私は考えています。この場合、すれ違い議論に参与していた対話者達がそのことに気づくということは、結果的に、各自がその場面でそれぞれ別々に有していた暗黙前提に気づくことになるわけですから。つまり、このようにすれ違うこともまた、その後の展開次第によっては、「哲学起動のよき足場作り」だった、ということになりうる、ということです。

気づくことの結果得られる哲学的な実りがとりわけ大きいすれ違い議論もある、とも、私は考えています。前提のくい違いが、**それぞれに自明で疑い得ないような二つの直観の衝突**から来るものの場合です。「直観の衝突」というのは、**一方の直観に従えば他方を否定せざるを得なくなるような特殊な判断状況**に判断者が追い込まれることです。このような状況を「特殊」というのは、こうした衝突を生み得るふたつの自明な直観というものは、私達の通常の生活のなかではうまく棲み分けていて、ことなる文脈でそれぞれ異なる役割を果す、と考えられるからです。それらが、「哲学的」な思索や対話のなかでは、時に、同時に同じ判断に適用され、その結果その矛盾が表面化する＝二つの自明な直観が衝突する、ということです。

尚、このような直観衝突に由来する議論の対立もまた、やや特殊ながら上記のすれ違い議論の一種です。そのような対立を演じている対話参加者達は、実は各自がそれぞれ両方の直観を持っているにも拘らず、「対話」という構図に助けられて一方の直観のことを一時的に棚上げしていて、そのゆえに対立できている、というすれ違い議論です。[2]

[2] 蛇足ですが、ここでいう「直観衝突」は、カントの「二律背反」をご存知の方は、それのこととご理解いただくとわかりやすいかもしれません。また、「直観衝突に由来する議論の対立」とはつまり、二律背反が一個人の中で知覚されるのではなく、個人対個人という構図をとって外在化・表面化したもの、とご理解いただくとわかりやすいかもしれません。（わかりやすくならなければ、この脚注は無視してください。）

今回のカフェでは、中盤以降、すれ違い議論が発生していたのではないかと、ずっと思っていました。ただ、私自身、対話の最中には「何」が起きているのかしっかり把握できず、「『芸術』という同じことばを使いながら、なにかのすれ違いが生じているのでは？」とあいまいな、そしてたぶん多くの参加者がすでに感じていたことをあえて口に出して介入するのが精一杯でした。[3]

結局私には、本当にそんなすれ違いがあったのかどうかも、また、参加者の間でその点についての合意が出来たのかどうかも、対話中にはわかりませんでしたが、録音を何度か聞き返してやっと私なりの結論が出来ました。この日の中盤以降の対話にはたしかにすれ違いがあったと思います。それも、ある直観衝突から生ずるものです。進行役の「すれ違っているかも」介入のあとは、そのまますれ違いを続ける大きな展開のなかに、（介入の成果かどうかはわかりませんが）この直観衝突のあぶり出しに寄与しうる小さな展開が各所に混ざりあいながら進んでいったように思われます。そうした「いいパス」も何本か出ていたにも拘らず、時間内に「シュート」（＝この場合は、直観衝突の発見）までにはつながらなかった。。。その意味では、時間切れとなったことが本当に悔やまれる対話でした。続けていれば、あるいは、すばらしい哲学的展開になっていたかもしれません。

念のため付け加えておきますが、私が直観衝突の発見（と断定させていただきます）にたどり着けたのも、今回の対話の録音を何度も聞きなおして考え直した結果です。今回の対話の中盤以降は、すれ違いのなかにそれについての共同自己反省のための足場作りがちりばめられた、すでに十分すばらしい哲学的展開でした。録音を何度も聞きなおした今、私はそう思っています。惜しむらくは、展開があまりに速すぎたため対話の最中には多くの参加者が（私自身を含めて）振り落とされたかもしれない。これも、進行役としては、自戒をこめて「残念だった」と言わなくてはならないと思っています。

では、今回の中盤以降の対話の背後にどんな直観衝突があったのか、というと、**「芸術」についての外在主義と内在主義**、とでも呼べるような二つの自明な直観の衝突です。この説明をするということは、「対話の展開過程」の分析・報告の範囲を超えて、「対話の内容」の分析・報告に相当踏み込むことになりますが、しかし、踏み込まなければ「直観衝突に由来する議論対立」とだけ説明されてもそれがどのような議論展開のことをいうのか、伝わらないと思います。すでに長いレビューですが、順をおってこの直観衝突を説明します。

[3] この介入は決して「いいパス」ではなかったかもしれません。この介入以降、対話参加者には「すれ違いの可能性を受けとめて、それを明らかにするために発言する」というスタンスと「すれ違っているかもしれないがとりあえず気にせずに、これまでどおり『芸術とは何か』について是々非々で争う発言を続ける」というスタンスの、二つの発言スタンスの選択が生まれました。しかし、どちらのスタンスから発言しているのか（あるいはどちらでもない別のスタンスからか）はっきりさせて発言するように、という指示などもなかったたため、各発言に「スタンス不明」という、それまでになかった新しい「不明瞭さ」の次元が加わり、結果、議論が「今『何』をしているか」が、かえって掴みにくくなった嫌いがあります。すれ違い議論の可能性を感じたとき進行役はどのように介入すると良いか。これは、私にとって今後の重要な検討課題です。

中盤以降の対話の主軸を形成したのは、あるひとりの参加者でした。その立場は、「芸術」というものの本質をまず

> ある種の創作技法やその評価の体系が、（時代を越えて）継承されたり（地理的に広く）伝播されたり、あるいは継承・伝播の過程を通じてかえって革新されたりする、という歴史現象

の中に見出す立場、とまとめてよいと思います。これに対し、多くの他の参加者（私自身含めて）は、振り返ってみると、「芸術」をまず、ある種の感動の経験として、またはその発露として理解する立場から出発していた、とまとめてよいと思います。ここでいう「感動の経験」とは、ひとが自分自身の内部に見出す唯一無二的な経験のことです。なので、「その発露」もやはり唯一無二的な個人の現象と理解されるものです。これらは、共有や再現を期待する対象にそもそもならず、よってはじめから継承・伝播する対象でもない、一期一会的な個人固有の現象としての「感動の経験・発露」です。

前者の立場は「芸術」の本質を公的・外在的に捉えるものです。このような立場は、よい（または高い）芸術と悪い（または低い）芸術の区別の実在と、そしてその区別を「正しく」つける「能力」の実在を直観的に認める立場でもあります。なぜなら、公的・外在的事実としての「芸術」という歴史現象は、①何かを「芸術的に評価する」という評価行為と、②誰かに「そのような評価行為を正しく行う能力を認める」＝「そのような評価行為をする資格・権威を認める」という（メタ）評価行為、これら二種類の評価行為抜きには成立しないからです。なぜそれが「芸術の良し悪し区別」の実在と「その識別能力」の実在を認める直観につながるかと言うと、これらの評価行為（メタ評価含む）がそうした行為として成立するためには、行為者（と、その行為をそうとして受け取る受け手）は、それらの実在を前提にしなければならないからです。いうならば、**これらの評価行為を行う行為者（とその行為の受け手）は、その行為（や、それを受けること）においてそれらの実在にコミットする**、ということです。「芸術」の本質を公的・外在的に捉える立場というものは、実はこのような「芸術的な評価」の行為にともなうコミットメントに由来する直観に順じようとする判断態度のことである、と私は分析します。これを、「芸術」についての外在主義、と呼ばせてもらいます。

もちろん、創作行為（作品制作もライブ・パフォーマンスも含むものとして）もまた、評価行為と並んで「芸術」という歴史現象の両輪、あるいは「卵と鶏」をなすものですが、これは外在主義の立場で言えば、主従の従のほうです。「芸術的」な創作をそうでない「ただの創作」から区別するのが評価だからです。尚、このような評価行為は言語行為とは限りません。特に、継承・伝播・革新の対象たりうるような創作の技術に関して言えば、です。ある創作行為は、それ自体が過去の「芸術的創作」技術を継承＝模倣しているならすでにその行為において過去を評価しているのであり、同様に、それが生み出したオリジナルの技術がもし未来の「芸術的創作」によって継承＝模倣されるならば未来によって評価されるのだ、と言えるから、です。

こうして、ことばによる直接的な「芸術的評価の行為」と、ある意味ではそれよりもっと直接的な継承＝模倣を通じてのそれとによって、「芸術」という歴史現象は、その他の有象無象の

創作行為と評価行為をもすべて含む「歴史全体」のなかでそれ自体を差別化し、自己同定するわけです。外在主義的にいえば、です。私達の対話のなかの発言でいえば、「よい芸術は時間のスクリーニングを経て残る」のような発言は、まさに、このような評価行為に実際に「手を染める」ことから自然に生まれる外在主義的直観を反映するものです。

一方、後者の立場は、「芸術」をあくまで私的・内在的なものととらえるものです。この立場は、ありとあらゆる評価行為から独立した、内的で自律的な「感動の経験とその発露」の実在を直観的に認める立場でもあります。これは実は、**広い意味での芸術的創作の行為**に由来する直観である、と私は分析します。少なくとも、「芸術的創作の行為」の本質を、

> 評価したりされたりすること（創作行為に含まれる過去の評価や未来からの評価を含む）から生まれる歴史的な関連性と他律性からの独立性、つまり創作行為における内在的な自律性・自発性・「個」性の発露の側面

に見出してよいなら、です。その意味においての「芸術的創作の行為」はいわゆる「感動の発露」を含み、それはまさに、それに「手を染める」ことによって行為者（と行為の受け手）が内的で自律的な「感動の経験とその発露」の実在にコミットすることになるような行為である。というわけです。このような実在を自明であるとし、そこに「芸術の本質」を見出す内在主義の直観に照らせば、外在主義者が「芸術の本質」として認める芸術的評価の行為は、「芸術の本質」とはまったく無縁ということになります。（言語的にであれ、模倣・継承を通じてであれ）「過去を評価する」ことになっていようがいまいが、「未来に評価される」ことになろうがなるまいが、そんなことは「芸術の内在的・自律的本質」とは無関係なのです。

以上が内在主義の直観と外在主義の直観のあらましです。さて、もう気づかれたかもしれませんが、この二つは、二つの「哲学的」な判断場面で衝突します。具体的には、それぞれの直観が自明とみなす実在について、それを実在と認めるか否かの判断場面において、です。通常、これらの直観はそれぞれに適当な判断場面で**所与の前提としての役割**をはたすものであり、その実在性を認めるかどうか、という判断を迫られることはありません。（例：「この作品はいいかどうか」というような判断や、「この作品は真に『作者が出ている』作品かどうか」の判断の場面などをご想像ください。）しかし、一方の直観が前提にする実在が他方の直観に照らして反省されたとき、「その実在は認めるべきかどうか」という問いが浮上する「哲学的」文脈が生まれ、かつ、その実在は「反対側」の直観によって否定されるわけです。具体的に説明します。

内在主義の直観に照らして見れば、外在主義的には自明な「芸術の良し悪しの区別」と「その正しい識別能力」の実在は、ある種のフィクションというか共同幻想のようなものに見えます。「芸術の本質」を個人の唯一無二的な「感動の経験・発露」に見出すことは、「芸術の比較」を、すくなくとも客観的・実在的なものとしては、ナンセンスとしてこれを否定することにつながるからです。「世界にひとつだけの花」的直観とでもいいましょうか。。。よって、先ほど紹介した「時間のスクリーニング」発言などは、内在主義の直観に従えば、「本当は『良いから残る』のではなく、『残ったものを良いとしている』だけ」にしか聞こえません。「芸術

的な評価」なるものが、普遍的とはとうてい言えないような時代的・地理的相対性をみせることも、「芸術の客観的比較」を否定する内在主義の直観を後押しします。私達の対話で出された例で言うと、ある時代のある国で「芸術」など全く意識されずに作られたものが、別の時代、別の国に運ばれて「これはいい！」と「芸術的に評価」されたりします。こうした相対性を考えると、今私達が行う「芸術的評価」も、「実在する良し悪しの区別」に基づくものと考えるのは無理があります。つまり、内在主義者は、評価者本人が「良し悪し区別」の実在にコミットして行う「芸術的な評価の行為」なるものが歴史的に実在することは認めるものの、そこでいわれる「芸術の良し悪し区別」のことは、本人のコミットメント＝直観に拘らず主観的・恣意的なものとみなすわけです。つまり、「実在する評価基準」などによるものではなく、もちろん内在的・自律的な実在として直観される「芸術の本質」にもなんら関係ない、「芸術とは無関係な類の、なにかしらの主観の発露」とみなすわけです。「良し悪し区別の実在」の直観などは、こうした発露のやりとりを行うなかから生まれる共同錯覚のようなものとして認識しながら。[4]

一方、外在主義の直観に照らして見れば、内在主義的には自明な「内的で自律的な個人の感動経験」の実在、すなわちそのような経験の「あらゆる評価行為からの独立」性のほうこそが、フィクション・共同錯覚に見えます。「感動の経験」自体がすでに「評価行為」だからです。「芸術的な感動」となると、さらに言うに及びません。それはまさに「芸術的評価の行為」です。評価行為を、継承・伝播・革新のような歴史現象を織り成す織り目の一つ一つ、のようにみなし、それらの相関性と他律性のなかにそれらの本質を見出す外在主義者にしてみれば、「『芸術的感動の経験』だけはひとつの評価行為でありながらそうした評価の連鎖から独立した自律性を有する」と考えることは、矛盾になります。さきほどは、「評価の歴史的・地理的相対性」が内在主義による外在主義直観の否定を後押ししましたが、ここでは同じ相対性が逆に外在主義による内在主義直観の否定を後押しします。特に、私達の対話でも指摘された、同じ人でも同じものを何度も鑑賞しているとだんだん最初の感動が「陳腐化」してゆく、のような、個人史内部における「評価の相対性」。「感動」と「新鮮さ」の密接な関係を思うと、なにかが「新しいかどうか」ということ自体が時代、土地柄、人などに相対的な「事実」である、ということは、注意してもし足りません。もし「芸術的感動の経験」にこのような相対性を認めるなら、それは、「内的で自律的」なものではなく、本質において「外的で他律的」なもの、となります。「感動」において「何」が起こっているのか、というと、本当は、何かの歴史への参加という外在的事実なのです。外在主義的に言えば。「感動の内在性・自律性」の直観などは、こうした相対性を意識から捨象して行うものとしての「創作行為」のやりとりの中から生まれる共同錯覚、というわけです。

私の分析によれば、3 月 22 日の対話の中盤以降では、「芸術」についてのこのような二つの直観の一方だけを意識して他方を一時的に棚上げすることで生まれる二つの「人為的に純化された立場」が発生し、こうした直観衝突に由来するすれちがい議論が何度も展開されたと思います。この分析が正しいとすれば、「すれ違い続けた」と分析される限りにおいて、この対話展

[4]蛇足ですが、カフェの冒頭で提出された仮定義も、提案者の意図は、まさにこのような内在主義の考え方へ向けての最初のパスとしてだったかもしれません。

開もまた「残念な展開」の一例でした。ただ、そのすれ違いの正体（＝直観衝突の対話的発現であるということ）の発見・自覚を促すような共同自己観察も散見されたと思います。本来なら、この日の対話のどの部分がそのような「よき展開」（のもと）になっていたのか、具体例をあげて説明するべきですが、すでにあまりに長くなってしまったため、割愛させていただきます。このようなすれ違い議論が発生しているかもしれない、となったとき、どのような発言がその正体の発見・自覚に寄与しうるか。。。これは、拙文を読んでくださったみなさん（私を含めて）への宿題、とさせていただきます。[5]

[5] 蛇足ですが、このメタ・レビューの１と２の両方の分析は、レオナルト・ネルゾンという哲学者が提唱した「遡及的抽象」という考え方にもとづいていることを明記しておきます。正確には、それを、「直観的判断は判断者の所属する言語の構造＝生活の構造に由来する」というような考え方に基づいて再解釈したもの、です。後者のほうの考え方は、ロバート・ブランダムという哲学者の影響によるものです。